

森林防疫ニュース

No. 20. 林野庁 森林害虫防除室 1953. 11. 1.

▲ マツケムシの便り： まもなく文化の日がきます。北見の皆様にはもう冬ごもりだそうですね。当地福岡では一同元気で食べつづけています。

▲ 「国土を緑化せよ」「サンセイ！」

▲ 「災害防止は治山、治水からだ」「シカリ！」

▲ 「この際病虫害防除費など節減はかれ」「バカナ！」

▲ この国の林業とくと御覽じろ。無医村や無医郡などはまだおろか。せめて各県試験場に病虫害研究員の配置ぐらいはほしいもの。

アメリカの資源保護

北海道大学理学部教授 牧野佐二郎

アメリカに上陸して最初に驚いたことは、吾々の周囲のあらゆる物、生物も無生物も、野も山も川も、あらゆる自然の物が実によく保護され、保存されていることである。自然は物心両面において吾々の生活を豊かにする。吾々の周囲に、木も草も川も生き物も何もいなくなつたとしたら、吾々の生活はどんなに味気ないものになるであろうか。自然の物を保護し、愛護することによつて人類は経済的にも、精神的にも、いろいろな方面に利益をうける。自分達の生活を豊かにし、国を富ませるために吾々は自然を愛さなければならない。

たしかにアメリカは膨大な天然資源をもっている。しかしアメリカでは決して“採るにまかせ、在るにまかせて”放つてあるのではない。天然資源は決して無限ではない。採るにまかせて放つておけば必ず尽きる時が来るのは当然である。アメリカは天然資源を利用する一方に、それを保護するために、国家として州として、いろいろな施設をもうけ、いろいろな方法を講じている。そしてまた、それらを実施するための土台工作としての科学的調査研究を怠らない。国の内務省の中にも州の政庁の中にも、生物保護局、森林保護局のような機関があつて、生物の保護、養殖、捕獲の取締り、国有林の管理、国立公園の管理や施設、ダムの開発、牧草地や養牧地の開発と保護、土地の改良などをやる一方に、それぞれの専門家がいてそれらの事業を行うための学問的研究を不断に怠らない。また一方、通俗雑誌やパンフレットの類を発行して国民の関心をよび起し、講習会を開いたり、映画会を催したりしては、常に民心に資源保護の重要性を認識させ、愛護の精神を植えつけることに努力している。また大学には、どんな小さい大学でも、自然保護に関する講座が設けられていて、それぞれの専門家が資源の種類、価値、保護の施設、方法、法律及び現況などについて講義をし、如何なる部門に属する学生といえども、この講義をきかなければ卒業ができないような制度になつている。

自然を愛護することによつて吾々の日常生活は豊かに朗らかになり、それによつて知らず知らずのうちに国が富むのである。自然の資源は、生物でも無生物でも、採るにまかせて放つておけば必ず尽きる時が来る。

情 報

◇ 発生速報

病 害

○ 紫紋羽病

千 葉 東葛飾郡柏町豊四季の10年生キリ、3年生スギ、3年生マツに発生、9月7日発見。被害面積3反5畝。本病のためキリ(植栽木)は全枯、スギ、マツも漸次枯死に瀕している。

(県・榎本善夫 9.10)

○ スギ苗の赤枯病

○ スギ苗の根腐病

秋 田 平鹿郡皆瀬村の2年生スギ苗に発生、7月29日発見。被害面積数町。被害は苗が衰弱したために発生したものと認める。

(林試秋田・佐藤邦彦 8.2)

○ スギ苗の裾腐病

秋 田 仙北郡中川村高屋苗畑の1回床替スギ苗に発生、8月10日発見。本病は大雨のため土袴が出来た部分、即ち地際の基部が侵されて枯死する。この被害はマツ苗にも発生する。

(林試秋田・佐藤邦彦 8.28)

森林防疫 ニ ュ ー ス

○ スギの赤枯病

岩手 和賀郡江釣子村上川のスギ2年生床替苗に発生、8月20日発見。被害面積約2畝、被害本数約1,000本。周囲が野菜畑のため空気の流通が悪い。今までに2回4斗式ボルドー液を散布した。(岩手林試・高橋玄臣 8.30)

○ スギの赤枯病(溝腐病の初期)

奈良 吉野郡秋野村大字才谷の植栽後2年目のスギに発生、8月16日採集。被害面積5町。異状は昨年10月頃発見、被害は本年6、7月頃最も顕著となる。8月上旬ボルドー合剤にウスプルンを混ぜ1部に散布した。県林務部の送付標本には主幹部に明瞭な病斑(癩痕)を認めた。

(林試樹病第1研 8.28)

○ スギ造林地の病害

三重 南牟婁郡飛鳥村大字大文字北の谷の35年生スギ人工林に発生、7月7日発見。被害面積2町、被害本数1,500本。被害は山麓から中腹にわたって群状に発生している。(県 8.5)

○ カラマツの落葉病

北海道 中標津署防風林3、は小班(根室国標津郡中標津町字俣橋)の10年生チョウセンカラマツ人工林に群状に発生、7月中旬発見。被害面積微害6町。現在枯死したものはないが、被害樹は生育が阻害されている。被害は本年初めて発生した。(帯広局 8.31)

山形 最上郡及位村釜淵林試釜淵分場試験林の約10年生カラマツに発生、7月10日発見。被害本数10本。被害は主に下枝に多いことを認めた。(林試秋田・庄司次男 8.28)

群馬 利根郡片品村の7~8年生カラマツに発生、8月中旬発見。被害地は海拔約1,000mの南面緩傾斜の草生地で、カラマツを密植した造林地で、被害は昨年にも発生した。

(林試保護部 9.10)

○ ヒノキ苗の立枯病(裾腐型)

神奈川 中郡西泰野村県営澁沢苗圃のヒノキ1回床替苗に発生、8月22日発見。被害面積1反。被害は夏の雨期がすぎて、日照が強くなると、今まで普通に生育していたものに発生して、急に萎凋して枯死する。現在の被害状況は床替苗の4%程度が枯死している。なおこの被害は今後幾分増加する見込である。被害は年々発生している。

(愛甲地事・加藤銈治 9.1)

○ クロマツの葉銹病

訂正 No. 17・p. 131, 「○ アカマツの葉銹病」の次の行に「○ クロマツの葉銹病」の病名を書き洩しました。追記を願います。

(防除室)

虫 害

○ オオキンカメムシ

長崎 諫早市久山町千茶ノ木の4年生シナアブラギリ人工林に発生、7月発見。被害面積微害10町。被害は毬果の肥大期間(6~11月)毬果から汁を吸うために、その肥大を阻害する。昨年にも多少発生したが、本年は特に発生が多い。現在捕殺を行つている。(県 8.24)

○ エゾマツオオアブラ

○ トドマツオオアブラ

北海道 陸別署陸別経営区22、い小班(十勝国足寄郡陸別村字遠別の7年生アカエゾマツ、トドマツ、ヤチダモの人工林に群状に発生、7月上旬発見。被害面積激害4町、微害8町5反。被害は上記3種の混植林25町8反の内、アカエゾマツに多くその面積2町。被害は本年始めて発生。薬剤による駆除を行つた。

同経営区5、い、22、い両小班(陸別村字上トラリ)の3年生トドマツ、カラマツ及び4年生アカエゾマツ、エゾマツ、トドマツの人工林に群状に発生、6月中旬発見。被害面積5、い小班中害10町。22、い小班中害4町。被害は従来多少発生して、年々増発する傾向がある。タバコダストと硫酸=コチンを併用駆除したが、結果は良好である。

上記各地とも被害樹は早急に枯死はしないが、被害が増大する時は生育が衰え、枯死に瀕するおそれがある。(帯広局 8.31)

○ トドマツオオアブラ

北海道 本別署本別経営区33、ろ、に両小班(十勝国中川郡本別町)の6年生トドマツ人工林に発生、8月上旬発見。被害面積中害19町5畝、被害は樹高80~100cmの昭和26年以降に伸長した幹又は枝に主として発生している。枯死したものはないが、成長は甚しく阻害されている。BHCその他薬剤により駆除を行つた。

陸別署陸別経営区2、い小班(十勝国足寄郡陸別村トラリ)の3年生トドマツ、ヤチダモの人工林に群状に発生、6月4日発見。被害面積中害8町5反。被害のため早急に枯死はしないが、生育が著しく衰えている。昭和26年度は既往植栽木、改植、新植のものに対して防除を行つた。昨年は発生しなかつた。6月中旬BHC粉剤γ1%にて駆除を行つた。(帯広局 8.31)

留萌林務署増毛事業区50林班(留萌郡増毛町字筈別)の5年生トドマツ人工林の約10%に発生、8月5日発見。被害面積微害16町。被害は本年初めて発生。現在著しい被害はあらわれないが、相当衰弱しているものがある。

(道 8.31)

森林防疫ニュース

○ スギマルカイガラムシ

京 都 上京区内の梅ヶ畑, 中川北山町(北山ダイスギ植林地帯の民有林)の15~20年生ダイスギ及びダイスギ苗圃に発生, 8月25日発見。被害面積林地3町, 苗圃5畝。

(西京大・岩村通正 8.31)

○ カラマツツツミノガ

岩 手 雫石署雫石経営区網張国有林(岩手郡西山村)の20~46年生カラマツ人工林に発生, 6月上旬発見。被害面積約190町。被害は岩手山東麓の造林地全域にわたり発生, 特に林内の被害が甚しい。被害は昨年から発生した。

(雫石署・松田 紘 8.26)

沼宮内署岩手山経営区の国見, 上坊山, 前森, 岩津張の各国有林(岩手郡松尾, 田頭両村)の約50年前後及び1部幼令のカラマツ林に点状或は群状に発生, 5月発見。被害面積1,400町。被害地は岩手山北~東麓にあり林内の林冠下部等に多発す, 本種の幼虫により葉が赤変, 枯死する。被害は昨年から発生した。

(沼宮内署・石田友安 8.26)

○ マツカレハ

茨 城 稲敷郡峯崎村の3~20年生アカマツ, クロマツの人工林及び天然林に群状に発生, 8月10日発見。被害面積激害200町, 中害80町, 微害20町。当地は大正3年頃本虫が異状発生して, 森林が全滅し皆伐したことがある。今回の被害は昨年から多少発生していた。当地方は森林面積が少く, その大部分がマツの単純林で, 樹令20年以上のものは極めて少く, 15~16年生のものが最も多い。食害のため森林一帯が赤褐色を呈し, 衰弱木にはマツクイ虫が発生している。今後被害が増大して, マツ林が全滅する時は, 附近農家の経済に甚大な影響がある。BHC粉剤にて駆除を行った。

(県 8.25)

長 野 上伊那郡中箕輪町字長田中島の5年生及び宇細木畑の7~10年生アカマツ天然林に発生, 7月1日発見。被害面積激害7町。両地とも発見が遅く, 被害樹は梢頭以外はほとんど全葉が食尽され, 特に長田中島では幼令樹のため枯死に瀕している。被害は本年初めて発生。被害は附近一帯の5~20年生アカマツ天然林約50町に蔓延するおそれがある。

(県 8.31)

奈 良 磯城郡桜井町大字桜井の町立桜井公園の30~50年生アカマツに発生, 8月25日発見。被害面積約5町。被害は昨年はあまり見受けられなかつたが, 本年は激害となる。全葉が食害されたがため枯損したものもあり, 松クイ虫が発生している。

(県・好川隆之助 Ag 池田 伊一 経指 9.1)

長 崎 島原市外14ヶ町村の1~30年生アカマツ, クロマツの天然林及び人工林に発生, 8月発見。被害面積微害1,000町。本地区には昭和15年頃大発生したことがあり, その後は毎年僅少の被害であつたが, 昨年秋から集団的に発生しはじめ, 本年春~夏に被害が蔓延した。この被害のため生育が極端に阻害され, 松クイ虫発生のおそれがある。1部幼令林はBHC粉剤にて駆除を行った。その他の区域においては, イザリヤ菌にて駆除を行った。8月初旬頃発生した幼虫が, 現在1~2令虫となる。

(県 8.24)

鹿児島 嚙喉郡下の大崎, 志布志の両町, 西志布志村の5~45年生クロマツ林に発生, 7月30日発見。被害面積250町。被害は志布志湾に面する海岸林に発生, 5年生林は激害となり, その他のものも数十本赤変している。幼虫は8月上旬体長約2cm。

(大崎町・隈本祐秋 8.24)

出水郡米之津町の4~100年生マツ人工林に群状に発生, 8月5日発見。被害面積激害50町, 中害8町, 微害12町, 枯損材積540石。被害は本年初めて発生。松クイ虫の被害も発生している。BHC粉剤 γ 1%にて駆除を行った。

(県 8.25)

川辺郡大浦村の35年生マツ人工林に群状に発生, 7月28日発見。被害面積激害5町, 枯損材積50石。被害は本年初めて発生。松クイ虫の被害も発生している。BHC粉剤を町当30kg散布, 駆除を行った。

指宿郡穎娃町の7~13年生マツ人工林に群状に発生, 8月14日発見。被害面積激害3町, 中害1町。本虫は昭和24, 25両年に大発生したことがある。8月下旬BHC粉剤 γ 1%にて駆除を行った。

(県 9.3)

鹿児島 鹿屋署州崎国有林78, ろ小班(肝属郡東串良町)の25年生クロマツに発生, 9月2日発見。被害面積約1町。被害は樹冠の中央以上, 特に頂芽が甚しい。BHC乳剤250倍液にて駆除を行った。

(署・柿木 司 9.4)

○ キオビエダシヤク

鹿児島 県下肝属郡根古町(No.16), 川辺郡万世町(No.17)に発生したことは既報したが, その他各地のイヌマキに発生, 防除を要する現在の被害面積, 被害本数は次の通りである。

枕崎市(3町, 19,250本)。

川辺郡知覧町(1町, 1,800本)。

熊毛郡西之表町(180町, 128,000本), 中種子町(170町, 117,600本), 南種子村(170町, 97,000本)。

県下の駆除を要する被害面積524町5反, 被害本数363,650本。

(県 5.8)

森林防疫 ニ ュ ー ス

○ シヤクガの一種

島根 八東郡大芦村大字垣ノ内のアブラギリ栽培地に発生、9月2日発見。被害面積激害30町中害10町、微害5町。被害本数激害地9,000本、中害地2,000本、微害地1,000本。激害地においてはアブラギリの全葉を食尽して、地上に落下、下草を食害しつつ周囲に移動している。中、微害地においては、現在盛んに葉を食害している。被害発生初期に、地元においてBHC粉剤 γ 3%を反当3kg散布したが効果は認められなかつた。(県9.4)

○ ブナシヤチホコ

青森 青森署八甲田経営区内の前岳国有林(東津軽郡横内村)、南及び北荒川山国有林(同郡荒川村)のブナ壮令林に発生、7月下旬発見。被害面積約1,000町。被害は八甲田山塊の中腹周囲に発生、昨年に比し被害程度が甚しく、殆んど冬枯れの状態となる。特にブナ一斉林は完全に食い尽され、散生林においては僅に被害の少い部分もある。(署・山上喜一郎8.26)

弘前署弘前経営区(中津軽郡下)のブナ壮令天然林に発生、7月下旬発見。被害面積約100町。被害は岩木山(海拔1,625m)の中腹東面及び南面に発生、被害区域内の殆んど全葉が食尽されているので、遠望すると一帯が赤褐色に見える。被害は昨年多少は発生していた。(署・工藤悦造8.26)

○ マイマイガ

北海道 空知郡音江村菊立吉住の8~17年生カラマツ人工林に群状に発生、6月8日発見。被害面積中害48町5反。昨年の被害面積600町。被害が漸次附近の造林地、畑、果樹園に蔓延するおそれがある。BHC粉剤にて駆除を行つた。

同郡上富良野町日新及び清富のカラマツ人工林、広葉樹天然林に群状或は点状に発生、7月23日発見。被害面積激害100町、中害50町、微害100町。被害は昨年多少は発生していた。被害が漸次農地に蔓延するおそれがある。

雨龍郡多度志村字クツカリシナイ1051の8,10~11年生カラマツ人工林に群状に発生、7月21日発見。被害面積激害2町。被害は昨年から発生した。被害を放置しておく時は全林木が枯死するおそれがある。BHC粉剤の散布、蛹の採取、焼却を行つた。

上川郡風連村字御料地三線の11,15年生カラマツ人工林に群状に発生、7月14日発見。被害面積激害11年生3町、15年生2町。被害は漸次農地に侵入、水稻をも食害している。BHC粉剤DDT粉剤、ホリドールにて駆除を行い、被害地周囲に防除溝を設置する等防除に努めている。

苫前郡苫前町羽幌原野の11年生カラマツ人工林に群状に発生、7月18日発見。被害面積激害1町4反5畝、枯損材積150石。被害は本年初めて発生した。被害木の80%が枯損、被害は蔓延のおそれがある。BHC粉剤にて駆除を行つた。

(道8.13)

帯広署管内札内経営区80林班、大樹経営区52,53両林班、防風林8林班(十勝国河西郡中札内村、広尾郡大樹町)の5~300年生カンワ、ナラ天然林に群状に発生、7月10日発見。被害面積中害45町。被害は数年前から多少あつたが、本年は特に著しくなつた。この被害によつて枯死したものはないが、被害樹は生育が阻害されている。現在国有林の被害は著しくないが、民有林には相当広く発生しているので、嚴重に警戒を行つている。(帯広局8.31)

後志国磯谷郡南尻別村字水上のシラカバ、ナラ、その他の天然林の全域に発生、8月1日発見。被害面積激害82町。被害は以前から附近のカラマツ人工林に極く僅かに発生していた。灯火誘殺、卵塊採取を行つた。

寿都郡樽岸村字日名の15年生カラマツ人工林に群状に発生、7月25日発見。被害面積激害1町、中害3町。被害は附近の農作物にも蔓延し、亞麻6反、牧草1町を食害した。砒酸鉛、DDT粉剤を散布したが著しい効果は認められない。

石狩国樺戸郡新十津川村字盤ノ沢の14年生カラマツ人工林に群状に発生、6月15日発見。被害面積激害1町5反。被害は昨年から発生した。BHC粉剤にて駆除を行つた。同村字壮志の7年生カラマツ人工林に群状に発生、6月20日発見。被害面積激害9反。被害は本年初めて発生した。BHC粉剤 γ 3%にて駆除を行つた。同村字上トツブの8年生カラマツ人工林に群状に発生、6月22日発見。被害面積中害1町5反。被害は本年初めて発見した。BHC粉剤 γ 3%にて駆除を行つた。

石狩国空知郡南富良野村字下金山の12年生カラマツ人工林の全林に発生、8月5日発見。被害面積激害11町、中害4町。被害は昨年より僅かに発生した。BHC粉剤、DDT粉剤、ホリドールにて駆除を行つた。

上川郡東川村の25~40年生シラカバ天然林に点状に発生、7月14日発見。被害面積激害5町、中害9町。被害は本年初めて発生した。BHC粉剤にて駆除を行つた。

北見国枝幸郡枝幸町字音標西音標風烈布の20~40年生ナラ、その他の天然林に点状に発生、5月20日発見。被害面積微害50町。被害は昨年僅かに発生した。BHC粉剤にて駆除を行つた。

森林防疫 ニ ュ ー ス

枝幸郡歌登村字ペヤマンの2年生カラマツ及び広葉樹の天然林に群状に発生、7月10日発見。被害面積激害50町、中害25町、微害5町6反8畝。被害は本年初めて発生した。被害が漸次農耕地に蔓延するおそれがある。BHC粉剤にて駆除を行つた。(道 9. 8)

○ クリイロナガハムシ (推定)

岡山 眞庭郡下の湯原町、中和村、苫田郡富村の3ヶ町村の主として100年生以上のブナ及び附近の20~30年生ブナにも発生、8月10日発見。被害面積約1,000町。被害は葉の表面の葉肉のみを食害し、変色、枯死(葉のみ)する。現在は幼虫が食害しているが、成虫も食害するのではないかと思う。(県・植月景雄 8. 31)

○ クルミハムシ

北海道 陸別署陸別経営区29、へ小班(十勝国足寄郡陸別村字止若)の23年生オニグルミ人工林に発生、8月5日発見。被害面積激害約1反、中害約1町3反、微害7反、被害本数3,300本。同地のオニグルミの平均直径は12cm、樹高は9mあるが、被害は小径級のもの程著しく、全葉が殆んど食害されている。被害はクルミに限り、天然林も同様である。同経営区31、へ小班の16年生オニグルミ人工林に発生、8月5日発見。被害面積激害約1反、中害1町3反、微害7反、被害本数2,175本。オニグルミの平均直径は8cm、樹高8m。被害は植栽木全部に発生している。両地とも被害は本年初めて発生した。現在枯死したものはないが、生育は相当に衰えている。被害地は沢の平坦地、周囲には広過混交林及びトドマツ、エゾマツ造林地がある。本虫が羽化する時は激増するおそれがあるので、早急に駆除を行う予定である。(帯広局 8. 31)

○ スギハムシ

千葉 山武郡源村大字酒蔵字池の山の5年生アカマツ林に発生、8月10日発見。被害面積3反13歩。被害地附近はスギ、マツの針葉樹の混交林で、被害木は植栽後2年、植栽木の20%が食害されている。(山武地事・吉田金吾 8. 24)

長崎 島原市、南高来郡下の千々石、小浜、西有家、有家の各町、三会、北串山、北有馬、深江の各村、西彼杵郡大草村の1市8ヶ町村の30年生マツ天然林、人工林及び40年生スギ人工林に発生、8月5日発見。被害面積激害50町、中害500町、枯損材積40石。本虫は北高来郡森山村において、昭和26年約1町発生した。南高来郡においては、本年初めて発生した。被害木は発育が阻害されるばかりでなく、松クイ虫の被害が発生するおそれがある。BHC粉剤にて駆除を行つたが、発見が遅く効果なし。(県 8. 24)

- スギハムシ
- スジコガネ
- スギノコキクイムシ

大分 南海部郡小野市村の5~30年生スギ人工林に群状に発生、7月発見。被害面積激害8反、中害1町、微害2町。被害は昨年僅かに発生していたが、本年急に激害となる。被害地周辺は針葉樹の造林地が多く、造林意欲に対する影響が大きいため、防除対策を樹立中である。(県 9. 3)

○ ハンノキハムシ

北海道 北見国網走市内のハンノキ天然林に点状に発生、8月8日発見。被害面積微害10町。被害は本年初めて発生した。BHC粉剤にて駆除を行つた。(道 9. 8)

- マツノトビイロカミキリ
- マツシラホシゾウムシ
- マツノキクイムシ

埼玉 大里郡小原村大字千代の30、41両年生アカマツ人工林に発生、8月31日発見。被害面積30年生9反、41年生1町1反。被害本数100本、被害材積約70石。被害地附近はアカマツの単純林で、区域面積約200町、被害は東部林縁に発生している。被害が附近に蔓延するおそれがあるので、被害木の伐倒、駆除を行つている。

(大里地事・横川登代司 9. 2)

- ヒゲナガカミキリ
- トドマツクイ
- トドノコキクイムシ
- ヤツバキクイムシ

北海道 北見林務署管内(常呂郡置戸町字春日)の30~350年生トドマツ、エゾマツの天然林に群状に発生、5月25日発見。被害面積中害395町。被害は昨年315町に発生した。本年4月20日~5月7日の間において、伐採跡地の伐根の剥皮、枝条の焼却を行つた。現在風倒木に発生しているので、被害が生立木に蔓延するおそれがある。丸太は山土場まで搬出し、巻立材に対しては薬剤にて駆除を行つた。(道 9. 6)

○ サビヒョウタンゾウムシ

青森 黒石署柏木山苗畑(南津軽郡山形村)のカラマツ、スギの1回床替苗に発生、6月発見。本春床替後、土中の幼虫が根皮を食害したがために著しく成長が害された。7月以降は特にカラマツの被害が甚しく大半が枯死した。スギ苗も赤味をおび枯死するものが少くない。駆除のために置いた餌に、越冬成虫が5月頃は集つたが、6月には著しく減少した。7月下旬新成虫(幼虫で越冬したものらしい)と思われるものが、多数誘致されていた。(署・千葉 悟 8. 26)

森 林 防 疫 ニ ユ ー ス

○ トドマツクイムシ

北海道 釧路国白糠郡白糠町上庶路の 80 年生位のトドマツ天然林に点状に発生、昨年 10 月 10 日発見。被害面積微害 45 町、枯損材積 300 石。被害は全林に発生している外、隣接国有林にも及ぶおそれがある。冬期間中に駆除を行う予定であったが、異例の積雪のために出来なかつた。

(道 9. 8)

○ トドマツクイムシ

○ ヤツバクイムシ

北海道 中川郡足寄村字上利別の 10~40 年生トドマツ、エゾマツの天然林に発生、昨年 11 月 10 日発見。被害面積中害 140 町。昨年 11 月発見当時、時期的に駆除が不能のために行わなかつたところ以後増加している。被害地は丘陵地の緩斜地で、昨年隣接林の山火の類焼跡地のトドマツ、エゾマツの散生地及びハン、シラカバ等の二次林である。被害は隣接国有林にも昨年から発生しているので、協同的に一斉駆除を行うべく計画中。

(道 8. 13)

○ マツノオオクイ

北海道 足寄郡足寄村字奥足寄の 17 年生カラマツ人工林に群状に発生、4 月 10 日発見。被害面積 2 町 4 反 5 畝、枯損材積 950 石。被害は本年初めて発生した。被害は全林に発生し、枯損木が認められる。

(道 8. 13)

中川郡豊頃村字豊頃東二線の 15 年生カラマツ人工林に群状に発生、5 月 15 日発見。被害面積激害 3 反、微害 1 町 7 反、枯損材積 66 石。被害は本年初めて発生した。被害林が生長中の人工林のため、被害は甚大である。激害の 3 反は既に伐倒、剥皮、焼却によつて駆除を行つた。

(道 8. 13)

清水署河西経営区 52, ろ小班(十勝国河西郡御影村字羽帯の 30 年生カラマツ人工林に群状に発生、8 月上旬発見。被害本数 4 本、被害材積 3 石。被害は昨年同所に発生、当時の駆除が完全でなかつたがために再発生したものと認められる。現在蔓延のおそれはない。(帯広局 8. 31)

○ マツノコクイムシ

兵 庫 養父郡國富村吉井の 35 年生アカマツ林に発生、7 月 6 日発見。被害面積 5 町。被害は昨年 10 月発生した。当時は極めて微害であつたものが、本年急激に蔓延した。

(南但地事・竹山貞義 9. 6)

○ カシノナガクイムシ

兵 庫 城崎郡西気村全域の 25~50 年生カン、ナラに発生、8 月 20 日発見。被害面積約 800 町、被害本数約 350 本。被害木は枯死に瀕している。被害は昨年から発生し、当時被害木の伐倒、焼却を行つた。(北但地事林務課 8. 29)

○ オオスジコガネ

北海道 石狩国上川郡美瑛町の 7~25 年生のカラマツ、ドイツトウヒ、トドマツの人工林に全面的に発生、7 月 20 日発見。被害面積激害 97 町 4 反。被害は本年初めて認めた。捕殺、灯火誘殺、BHC 粉剤散布等にて駆除を行つた。

(道 9. 8)

茨 城 高萩署高萩経営区 112, な小班(松岡町大字上手綱字大平)の 6 年生スギ, 149, へ小班(黒前村大字福平字相)の 11 年生スギに発生、7 月 26 日発見。被害面積 5 町 3 反 2 畝。新芽が食害されている。

(署 9. 3)

○ スジコガネ

北海道 胆振国虻田郡留寿都村字西ノ原の 15 年生カラマツ, 15 年生ドイツトウヒ, 4 年生トドマツ等の人工林に点状に発生、8 月 10 日発見。被害面積激害 1 町, 微害 3 町(カラマツ 5 反, ドイツトウヒ 5 反, トドマツ 3 町)。被害は本年初めて発生した。捕殺、灯火誘殺にて駆除を行つた。

(道 9. 8)

○ スジコガネ

○ ヒメコガネ

北海道 十勝国河東郡上士幌村全域の 2~6 年生のカラマツに発生、8 月 2 日発見。被害面積激害 10 町, 中害 120 町, 微害 40 町。被害は昭和 18 年 7 月下旬に大発生し、ドイツトウヒ, カラマツは枯死したものもあつた。その後も少数発生していた。被害は風あたりのお少い所のものが特に多い。学童約 100 名にて捕殺を行つた。

(道 9. 8)

上士幌署音更経営区 4~6 林班(十勝国河東郡士幌村字栄進)の 1~3 年生カラマツ人工林に群状に発生、8 月 5 日発見。被害面積中害 100 町。被害は昨年附近農耕地、防風林に発生していた、本造林地には今年初めて発生した。被害は附近に蔓延するおそれがある。附近のワラビをも食害している。捕殺、灯火誘殺、薬剤散布等により駆除を行つた。(帯広局 8. 31)

○ マツノクロホシハバチ

長 野 北佐久郡大里村大字菱平字柳平の 6~27 年生カラマツ人工林に発生、7 月 30 日発見。被害面積激害 26 町 5 反。8 月 3 日現在第 3~4 令虫が食害中である。被害は昭和 26 年から発生し、当時薬剤駆除を行つた。被害は区域内の全域に発生している。1 化幼虫の発生時期は 7 月中旬~8 月初旬の間で、前年よりおきている。食害は昨年の第 2 化幼虫から特に甚しくなつた。被害によつて生育が極度に阻害されるばかりでなく、1 部は枯損のおそれがある。被害は今後附近の山林に蔓延するおそれがある。(県 8. 24)

○ マツノミドリハバチ

鳥 取 東伯郡竹田村大字大谷の 30~50 年生アカマツ天然林に発生，8 月 20 日発見。被害面積中害 1 町。被害は本年初めて発生した。被害木は薪炭林内に点在する生育良好のものに発生している。伐採駆除を行つた。(県 8. 25)

○ マツバノタマバエ

島 根 県下隠岐島における本種の発生経過については No. 14 p. 97 で既報したが，各町村における被害面積，被害材積は次の通りである。

海士郡海士村 (700 町，250,000 石)。

周吉郡西郷村 (30 町，9,600 石)，磯村 (35町，11,200 石)，中条村 (20町，6,400 石)，中村 (5 町，1,500 石)。

穩地郡都万村 (30 町，120,000 石)。

知夫郡黒木村 (70 町，25,000 石)。

(県 7. 22)

○ トウヒノハダニ

北海道 陸別署斗満経営区陸別苗畑 (十勝国足寄郡陸別村) の 5 年生エゾマツ，3 年生トドマツに発生，6 月 28 日発見。被害面積微害 100 m²，被害本数 4,200 本。

同経営区大普地苗畑 (西足寄村字大与地) の 5 年生エゾマツ人工林の苗木に発生，6 月 11 日発見。被害面積中害 200 m²，微害 300 m²。

上記 2 苗畑とも，被害は昨年から発生し，当時駆除を行つた。被害苗木の小枝，新梢部等の上部の葉は黄斑点を呈している。被害によつて枯死したものはない。本虫は 1 回の駆除では効果がないので，硫酸=コチン 900 倍，或は同 500 倍液，タバコダスト等にて駆除を行つた結果，その後被害は減少している。

帯広署札内経営区札内苗畑 (十勝国中川郡幕別町字札内) の 4 年生トドマツ苗木に群状に発生，6 月中旬発見。被害面積 2,000 m²。被害は本年初めて発生した。被害は本年春葎簀の霜除を施した箇所によく発生している。硫酸=コチンにて駆除を行つた。その後被害は減少したものと認める。

(帯広局 8. 31)

◇ 詳 報

○ マツカレハ

埼 玉 大里郡下の吉岡，御正，小原，本鼻，鉢形，本郷の各村を中心に，その周辺一帯に，本年マツカレハが大発生して，昨年発生したマツノキハバチ (No. 11, p. 61) の被害を遙かに越して，アカマツ林 600 町に及んだ。これに対して 5 月 4 日，本鼻村が BHC 粉剤 γ 1% と DDT 粉剤 10% の散布を始めた。6 月末までには本鼻村 20 町，本郷村 10 町，小原，御正両村 33 町，鉢形，吉岡両村 5 町，合計 68 町に薬剤を散布して，可成の駆除効果をあげた。その上昨年林業試験場浅



小原村森林組合がマツカレハの買上げを
宣伝するポスター

小原村役場掲示場

川分室から分譲をうけたイザリヤ菌 (黄蘗菌) 保菌虫による駆除をも行つたが，これは効果がなかった。その後折角散布した薬剤も降雨つづきで流される等で，徹底的な駆除は出来なかつた。

小原村は全村林地の 80% をアカマツ林がしめ，しかも，被害町村中最も食害が甚しく，激害 26 町 (内 5 町は全林木が枯損，生育の見込はない) 中害 86 町，微害 117 町となつた。そこで笠原村長，柴森林組合長等が中心となり，森林所有者は勿論，一般村民にも呼掛けて，7 月 14~16 日の 3 日間マツカレハ幼虫の採取買上げを行つた。その期間老人，女子供までが参加協力して，1,199 貫 130 匁 (14 日 300 貫 730 匁，15 日 349 貫 600 匁，16 日 548 貫 800 匁) を採取した。これを貫当 240 円で買上げ，延人員約 1,000 人に 287,800 円を支払つた。採取したマツカレハの幼虫は焼殺した。

ついで鉢形村でも 8 月 9 日~10 日の 2 日間マツカレハの繭の採取を行い，26 貫 600 匁 (9 日 12 貫，10 日 14 貫 600 匁) を採取した。

当時この 2 ケ村は 豊繁期であつたにもかかわらず，森林所有者，一般村民，女子供まで全村あげての協力を得たことは，林業に対する観念が高まり，愛林思想の顕れであると思ふ。

(大里地事・横川登代司 Ag 8. 31)

解 説

マツカレハの発生周期と早期防除

筆者は愛知県丹羽郡池野村八曾国有林におけるマツカレハの発生消長について最近 27 年間調査を行つて来た。(1927 年より 1930 年までは当該担当区員の調べに依る)

この国有林は、所謂マツの造林不成績地で、その原因とする所は土質も良好ではないが、別に大きい原因として第 I 表に示す様にマツカレハが 5~6 年に 1 回の周期で大発生をしてきた箇所である。この大発生の翌年即ち第 1 年次においては山の尾根通りに極く少く発生し、第 2 年次には尾根通りはかなり多い密度を示し、次第に沢通りにも点々と被害を認め、第 3 年次には被害は最大に達し、尾根通りにおいては全く枯死するものを生じ、然らざるものは漸く枯死を免がれても樹勢が極度に衰える。併し第 4 年次は全く害虫を見受けられぬ程急速に終息する。この様にして 5~6 年の周期をもつて発生するので、マツの生育は 50 年を経ても一向に進まず生長状態に異状を呈している。

第 I 表 マツカレハの発生周期

年 度	被害状況	摘 要
1927	++	凡例
28	+++	
29	++	- 稀に幼虫が見られる状態の年
30	-	
31	+	+ 樹高 2 m 前後のものに 5~10 頭の幼虫の見られる状態の年
32	++	
33	+++	++ 発生した幼虫が針葉の 5 割を食害している状態の年
34	+	
35	-	+++ 大発生して葉の全部を食害して移動する程の被害状態の年
36	+	
37	++	+++ 同上発生をなし、その多くが <i>Isaria farinosa</i> 菌によつて斃死している状態の年
38	+++	
39	+	+ 幼虫の発生少く残つたもの多くが <i>Isaria farinosa</i> 菌で斃死した状態の年
40	-	
41	+	-
42	++	
43	+++	-
44	+	
45	-	+
46	+	
47	++	-
48	+++	
49	+++	-
50	++	
51	-	+
52	-	
53	+	

調査場所 愛知県丹羽郡池野村岡崎営林署 八曾国有林 (林班 32~42) 1927~1930 年の斃死状況は不明

第 II 表 マツカレハの病原とその罹病期

総称	病 名	病 原	罹病期			
			卵	幼虫	成虫	
硬化病	黄 蘊 病	<i>Isaria farinosa</i> (DICKS) FRIES.	卍	卍	+	
	黒 蘊 病	<i>Oospora destructor</i> (METSCHNIKOFF) DELACROIX.	卍	卍		
	緑 蘊 病	<i>Nomuraea Prasina</i> MOULBLANE.		+		
	褐 蘊 病	<i>Aspergillus oryzae</i> (AHLBURG)	卍		+	
	黄蛹茸病	<i>Isaria militaris</i> LINK.			+	
	松枯葉茸病	<i>Hirsutella sp.</i> (MATSUKAREHA.)		卍	卍	+
原虫病	微粒子病	<i>Nosema bombycis</i> NAGELI.	+	卍	卍	+
	"	<i>Nosema sp.</i> (KUSUSAN.)	+	卍	卍	+
膿 病	多角体病	<i>Chlamydozoa sp.</i>		+		
軟化病	卒倒病	<i>Bacillus satto</i> ISHIWATA.		+		

この害虫の終息に大きな役割を果たして居る生物因子としては寄生性のハチ、ハエ、捕食性のヤブサシガメ等があり、又第 II 表に示す様な各種の寄生性病原菌がある。これら病原菌の内、この国有林の何時の周期においても強い発病性を示すものは黄蘊菌である。

この黄蘊菌は幼虫の齢を問わず、又蛹期にも寄生する。特に湿気の多い 9 月の雨期に 1, 2 齢の幼虫が葉上で白色になつて斃死し、梅雨期に老齢幼虫がマツの樹下に白色となつて斃死することが多い。特に大発生をした年には至るところで夥しく黄蘊菌による斃死虫が目撃される。

この様にして自然にまかせておけば被害樹はたとえ天敵その他の因子のため終息するとは云え、この 3 ヶ年間に食害されることによつて、林業的の損失は大きい。

かかる周期の明らかとなつた山林を、この害虫から護るためには、発生第 1 年次に山の尾根通りに発生し始めた頃、幼虫の薬剤抵抗の弱い 1~2 齢 (9 月頃) の時期に撲滅することが森林保護の要訣であろう。

(林試浅川・小山良之助)

観 察

ポプルス害虫—2ツ

パルプ資源として、ポプラ類の改良や、育成が次第に問題になつてきている。ところが、このポプラ類は、非常に虫のつきやすいもので、以前、北大の人が、札幌だけで200種近くの害虫をみつけたということである。

林業試験場釜淵分場（山形県）では、先見の明があつたのか、1941年頃から、各種のポプラ類をあつめたり、かけ合せをつくつたりして、いまのところ、16種ばかりのものがある。

これらにも、やはり、いろいろの害虫がアタックするわけだが、その大部分は葉を食う虫のようで、これらは薬剤散布などでどうにか防除も出来ると思う。

しかし、次に紹介する二つの害虫は、いまのところ防除の目安もなく、将来、これらの造成にそなえて、十分に注意も研究もしておかなければならないものと思う。

1. 材に食入るゾウムシ

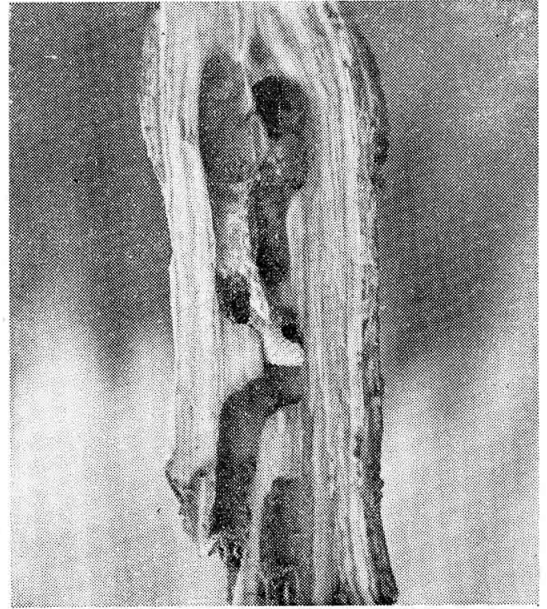
この分場にアメリカヤマナラシ *P. nigra* とドロノキ *P. maximowiczii* のかけ合せで、なかなかいゝ生長を示し、お客さんがこられるごとにいつも自慢で見ていると、宝物のような1本のポプラがある。一度こゝにお出になつたことのある方は、きつとご記憶にあるものと思うが、これが一昨年の夏わずかの風で、先から2mばかりのところまで折れてしまつた。

みると材のなかに幹にそつて無数な虫孔があつた。その後注意しているところの木ばかりでなくほかのポプラ類にも主幹やあるいは、すこし太い枝にはよくこの虫の穿孔がみられた。

今年になつてその幼虫からの飼育により、ようやくヤナギシリジロゾウムシ (*Cryptorrhynchus lapathi* LINNÉ) であることがわかつたわけである。

このようにこの虫をはじめに見つけたのは交配種であつたが、其後の観察ではほかのポプラ類もおかすもののように、どの種がこの虫に抵抗が強いだらうかといふことは、夫々の木の年令や大きさが、まちまちでまだよくは調べかねてはいるが、たまたま同じ構内に、隣接して8年生のドロノキとギンドロの見本林があり、この春そこでこのゾウムシによるひどい穿孔をみたので、両樹種の生長や加害の状況を調べてみた。

数字はすべて省くが、こゝではゾウムシの穿孔は、ギンドロだけで、ドロには全然ついていないといふことがわかつた。



第1図 ヤナギシリジロゾウムシによる材の食害

ところで両者の木の生長をみると、ギンドロは太さではまさっているが、樹高は劣つている。この原因はギンドロは生長はいゝが、だいぶ雪害をうけたためのものであり、つまりギンドロは、ドロに比べてもろい生長をしているといえるらしい。一方又、ギンドロは樹皮に5mm位、タテにさけた樹脂溝のようなものがあるのが特徴でもある。

こういふ折れやすく傷つきやすいこと、又自然のサケ目をもつということが、或は、この虫の産卵に好都合なのかとも思われる。又、ゾウムシがさかんに木屑を排出している孔に、アリ、サビキコリ、シデムシなどがむらがつている。こんなことからこの木は虫の好きなうまい汁でももつているのかとも考えられる。

次に、こんどはゾウムシの入つた孔の方向を調べてみたが、これによると南側が他にくらべ明らかに多かつた。

このことから、この虫も多分カミキリやゾウムシの多くがそうであるように、light-loving-insectの仲間に入るものと想像されそうである。

こういうたぐいの虫は勿論、薬剤の注入などで駆除することは考えられるにしても経済的にはたいへんむずかしいことになつている。

だから、いまかりにこのlight-loving-insectであることが本当だとすると、これらの木をいよいよ造林するというような時に当つては、虫の関係から、植栽密度などの考慮が是非必要となるだろうと思う。

さて、ギンドロは穿孔虫に弱いことがわかつたが、一面ポプラ類に多い葉食虫は、これとは反対に、ほとんどよりつかない。

これは多分葉をおおっている毛のためかもしれない。

2. 綿虫によるドロの葉の虫瘻

写真にみるように、ドロノキ系統のものの葉の表面が小指大にふくれる、かりに名づければドロノハフクレと若枝に出来る親指頭大の虫瘻、これもかりに名づければドロノエダフクレとがある。

進士織平氏の著書にこれによく似たものがのつているが、有翅虫の形態からいまのところ別種のように見受けられる。先日北海道支場の井上博士がお出のとき、お持ちかえりになつて、目下種名を決定していただいているわけである。

生態もまだよくわかつていないが、経過を追つて簡単に報告しておく。

5月のはじめ固い冬芽から新葉が出はじめる。葉がまだほんの数mm位の大きさのとき、既にこの無翅の親虫がくつついていて、中には既に小さなハフクレをつくつているものもある。これがいわゆる幹母 Fundatrix といわれるものである。葉はまもなく通常の大きさに開くが、その頃は既に虫瘻は小指大となり、幹母は数回の脱皮で、まるまると肥り、さかんに単性生殖をくりかえしている。この1頭の親虫からひり出される仔虫は、去年かぞえたもので一番多かつたものは160をこえた。虫瘻はたいてい1枚の葉に1つか2つだが、中には5つついているものもあり、こういう被害葉が、昨年の調べでは全葉の7~8割にも達していた。このハフクレはすべて葉の表面にふくれ上り、裏面には合せ目がある。

6月の末になるとこの合せ目がわずかに開いてこのすき間から、翅の生えたいわゆる移動雌虫が次々とどこかへとんでいく。

このどこかへ飛んでいくということは一番大事なことであり、おそらく寄主をかえるため、特定の植物の根にいくものだろうが、残念ながら、まだ見つけかねている。

おそらく彼等はその根の間で数回の無性繁殖をくりかえし、秋おそくなつてこんどははじめて有性の翅のあるものが生れ出て交尾をし、翌年の葉の出る固い芽の中に卵を生みつけるのではないかと思う。

したがつてこの中間寄主などがわからないと、適確な防除法もおそらくうち出されないと思うがこゝでたいへんおもしろいと思うことは、この虫瘻の出来るポプラは *P. maximowiczii* (ドロノキ) *P. Koreana* (チリメンドロ) *P. Simonii* (テリハドロ) の三種だけだということである。ところがこの3種の葉はまるでよく似ていて、少



第II図 綿虫によるドロノハフクレ

くともわれわれ素人には葉だけで区別することは一寸出来そうもない。しかし、虫瘻の色をみるとドロノキ、チリメンドロは白つぼい黄緑色になるが、テリハドロは美しい紅色になつて、だからむしろテリハドロを区別するには、この虫瘻の色によつた方がいゝ位のものである。

さてこの虫瘻による経済的な被害程度というものは、よくわからないが、少くとも被害葉は8月のはじめにはもう殆んど落葉するし、枝についたコブフクレは、そのコブから先の方がたいてい枯れてしまうので、おそらくそれだけ生長量の減退は予想出来るわけである。

中間寄主がみつければ、何か防除法の見当がつくが、有性虫の産卵時期をねらつて薬剤散布を行う等、いずれもこれからの研究問題である。

(林試釜淵・余語昌資)

北海道のマイマイガ発生地帯の見聞録

我々は層雲峡経営区の総合調査団員として北海道の山の中に入つて菌害木を調べたり、害菌を採集したり、また虫害を調べたりして2週間を山の中で過した。林試本場今関保護部長、北海道支場井上保護部長と私の3人である。調査には今関部長と私は菌害の方を受持ち、井上部長は虫害の方面を調べられたが、このような大規模なしかも多くの分野に亘つた総合調査は今迄に林学関係では余り見られなかつたので、我々保護関係の一同も眞剣にこの調査と取組み、成果も見べきものがあつたと確信している。この眞剣さがかえつて時々失敗を演ずる原因となつて、時には皮肉られた

森林防疫 ニ ユース

り、苦笑されたり面白いことも随分あつたが、特に井上保護部長はこの“真剣さ”を身につけておられること天下一品で、酒ならずとも酔が廻つて、一瞬にして御自分が昆虫になりきつたような言動をされる時もあつた。このような時には今関さんと私は茶々を入れるのが常であつたが、井上さんは必ず頭をかいて“いやいやー”という特徴のあるアクセントで照れかくしをされる。このような仲々ニューモアに富んだ一面を含んだ調査でしたが、マイマイガの見聞はこの調査の直後に我々3人で行つたもので、このような雰囲気の中でそろそろ家が恋しくなつてきてからの出来ごとであることを御承知して頂きたい。

9月1日旭川を早朝出発。天候はよいが、未だ山の調査の疲れが抜けていない。車で調査団長の松川先生とお会いし、途中まで御一緒に願つた。我々三人は紋別の白滝で降りたが、この辺一帯は到る所広葉樹林で、シラカバが圧倒的に多い。聞く所によると山火事再生林とのことである。この附近の森林は遠くから見るとまだ9月の始めというのに枝には青葉が少く、色の変りかけた葉がわずかに残つているだけである。中には葉の全くない丸坊主の樹木も見られ、一目でブランコケムシの被害林であることに気が付く。望遠鏡でよく見ると色の変りかけた葉は、一部がブランコケムシに食害され、やつと残つた部分がかろうじて着いているという有様であつた。時々頭の上を大きな薄茶色の蛾が飛んで来て、あつちこつちと舞つているのに気がついたが、真風間から何んだか薄気味の悪い思いがこみ上げてくる。井上さんの説明でこれが有名なブランコケムシの成虫であるマイマイガだと教えられた。よくみるとあちらにもこちらにもという具合にかなりたくさん数が舞つていて、部屋の中にまで侵入してくるのには閉口した。家の床下や電信柱を見ると無数の蛾が止つていて、その附近には必ず灰褐色の塊りになつた排泄物が見られ、その塊の中に小さな粒々があるが、これが卵である。この卵は屋外のあらゆるものに産みつけられるが、家の中の調度品や台所用品にまで産みつけるために、附近の商店や民家では大切な商品や調度品に被害を与えられる。附近の広葉樹の森林に入つてみると、この光景が亦異様である。森林内一面にフラフラ舞つている蛾がいるかと思うとシラカバの樹皮には産卵のために止つている蛾や卵でシラカバの特徴のある白い美しい肌は見るも無残な姿を呈している。葉の食害は針葉樹にまで及び、附近のカラマツの造林木の幼樹の葉も被害を受け、一時は丸裸になつたそうであるが、我々の行つた時には既に新芽が伸び出している時であつた。白滝から丸瀬布まで途中の山を見ながら車を走らせた。丸瀬布で夕食をと

り、夜の蛾の飛来状況を見ることになる。辺りが真暗になつた頃、附近の街燈にはちらほら蛾が集つてくるのに気がついたが、時を経るに従つてその数はだんだん増してくる。我々三人は営林署の車に乗込んで蛾の丸瀬布の街を見学に出掛けたが、自動車のヘッドライトに向つて無数の蛾の襲来に会い一寸まごつた。街に入ると道の両側の商店や民家はほとんど戸を閉めて中の電燈を消している。道の真中には30米位の間隔で焚火をしており、大勢の人が手に手に箒を持つて焚火に白いものをかき集めている。我々は車から降りて見物することにした。電燈の消えた夜の街の道路に沿つてずーと続く焚火の光であたりは異様な明るさであるが、焚火で燃える蛾の臭気があたり一面を覆い凄惨な感じが漂つていた。蛾の飛来は益々激しく、鉄道の電燈には吹雪のように蛾が風に乗つて行き過ぎるのが遠く望まれる。焚火には直接飛込むもの、道路上に落ちるものと数知れない蛾の飛来である。街はまるでぼたん雪が降り頻つていようで、道路は一面に蛾で敷きつめられ、民家の戸も窓も蛾でぎつしりと埋め尽されている。街の人々はこの道に落ちている蛾を焚火にかき集めるのに夜の労働を課せられている。蛾は我々のシャツと云わずズボンや髪にもついてきて体の中にも入ってくる。卵を産みつけるときに出す粘液が皮膚に触れると痒いこと夥しい。我々はこの難行に耐え難く、また汽車の時間も迫つて来たので駅に向い、待合室に飛込む。待合室は戸をしっかりと閉めきつて蛾の侵入をほとんど許さない。こゝで皆は悲鳴をあげながら上衣、シャツ、ズボンに附いている蛾を取除く。今関さんの洋服は蛾の粘液で染だらけである。上衣をとるとがさがさと音を立て、蛾が飛立つ。3人は夫々あつちこつちと手をやり、痒い所をかき始める。一寸他所では見られない状況である。夜汽車に乗込んで北見に向い、やつと落着いて今迄の悪戦苦闘の経験を語り合つていると、井上さんがまだ体の中が痒くてたまらないと云い出し、ズボン、シャツと脱ぎ出し、ストリップ姿になつて体を点検し始めると体の方々に蛾がついていて卵を産みつけている。乗客は呆氣にとられているが、一向そんなことに頓着ない。その内に体の或る中心部に卵を産みつけているのを発見した。本人は一寸照れ臭そうだが、今関さんが、“変な所に産みつけられたな”と云い出して、常日頃キノコの学名をつけるのに慣れておられるため、蘊蓄を傾けられてこの蛾に異名として“エロ蛾”なるものを与えられた北見の宿舎に夜遅く着いて、今関さん御自身も体を点検されたが、同様な所に産みつけられていた。将に与えられた蛾の名前に狂いなしという所である。(林試菌類研 青島清雄)

質 疑 応 答

赤枯病原菌殺菌にウスプルの
使用について

【問】 1950年、日本林学会東北支部発行の育苗研究会記録の80頁に伊藤博士が分生孢子が地上に越冬残存している場合、或はゲンメ型分生孢子として生存して居る場合ウスプルンを使用すれば有効であると思われると述べてありますがその理由、及び苗木の消毒には効果がありませんか、ないとすればその理由、本誌No. 13の質疑応答欄のように地上の分生孢子は翌年の伝播にはあまり心配ありませんか。

(長野下伊那地事・関島 Ag.)

【答】 越冬孢子に対してウスプルンを使用すれば有効であると思われると述べたのはウスプルンは土壤消毒を簡易に且つ又殺菌力も相当強く効果がある事から述べたものと思います。

次に苗木の消毒にも相当効果が認められますが、ボルドー液に比べて高価につく事と比較的展着力が少なく雨、露に溶解流出するため効力が稍々劣るのではないかと思います。

土壤の越冬孢子についてですが、これは苗木衛生、病害防除という点からして、前年度において病害の発生した箇所には種々の状態で越冬し、これが翌年罹病に影響を及ぼすという事を忘れてはなりません。

(林試樹第1研)

カラマツの蜘蛛の巣病

【問】 7～8月頃まで順調に生育してきたカラマツの1～2回床替苗が最近急激に黄変し別便の様な病徴を呈して枯れます。被害箇所は比較的湿地で集団的に発生します。

【答】 これはリゾクトニア、ツラニ菌によるカラマツの蜘蛛の巣病です。この病害はまき付床、床替苗で密植された場所、即ち通風、採光の不良で、湿潤な箇所に盛夏の候より初秋にかけて良く発生する病害です。

- 防除法
1. 苗の密植をさげ、窒素質肥料の過用におちいらぬようにして苗を強健に育てる。
 2. 有機性水銀剤(ウスプルン、リオゲン等)800～1000倍液を事前に1～2回散布すればよい。
 3. 被害箇所は被害苗を含み周囲の健全苗も入れてぬきとり焼却し、その跡地に有機性水銀剤の800～1000倍液を散布する。
 4. 排水を良くする事。

(樹病第1研究室)

ケーブル被覆用鉛板の食痕

【問】 松材でつくつたドラムに巻いてあるケーブルの被覆鉛板が、虫によつて孔をあけられます。原因及び防除法をおしらせ下さい。

(古河電機工業株式会社)

【問】 製材された材中に棲息しているカミキリ、ゾウムシ、キクイムシの類が、孔道をうがつ途中、材と外界物との接点へ来た場合にその接触物が木材或いは、鉛のような軟かさの物質ならば、その接触物にまで孔道を掘ることが、屢々あります。御質問の穿孔も、このような原因に依るものと思われます。防除法としては、(1)ドラムに穿孔虫の穿入している材を使用しないこと。(2)材中の虫を殺した上で、ドラムをつくること。(3)ドラムと鉛板の間を、ブリキ板その他穿孔虫が穿孔し得ないもので、隔離すること。

(林試 昆虫研)

ネキリムシ防除—BHC の効果

【問】 当苗畑においては、春床作りの際、BHC粉剤(r 0.5)を反当り10kg混入しましたが6月頃から、ネキリムシによる被害が出ました。BHCの効果について、御説明下さい。

(茨城県内 苗畑経営者)

【答】 苗床にBHC粉剤を混入した場合、有効期間は凡そ1ヶ月内外と推定されます。そのためこの期間に、BHCに接触する機会がなかつたコガネムシ幼虫は、生き残つて苗木に加害します。関東北部から北の地方では、床作りの時には、未だコガネムシ幼虫の活動が不活潑ですから、上のような苗木の被害が屢々あります。お尋ねのような場合には、床替苗床の場合は、中耕を兼ねて、粉剤を根際に混入するか、又は除草の後、床面が柔らかいときに、BHC又はDDTの乳剤を散布し、地中に浸透させるようにしますと、被害が少くすみすみます。

(林試 昆虫研)

雑 録

第2回全国林業地区技術普及員実績発表大会

10月8日、東京教育大学農学部教室において、各都道府県から推された83名の地区普及員の実績発表の予選会が催された。翌9日は全国町村会館において、前日全国から選出された12名の審査が行われ、引つづき入選者の賞状授与式が盛大に行われた。

日本鳥類保護連盟協議会

10月15日、衆議院第2議員会館会議室において、協議員会が催され、関係学会、各団体、文部、厚生、農林の各省の協議員が参集、会則の変更、会務運営等について協議が行われた。

(防除室)